

紀延興『雄山記行』〈上司家蔵〉翻刻

一六

荒井眞理亜

ここに紹介する紀延興『雄山記行』は、手向山八幡宮神主上司家所蔵である。

写本であり、誤字脱字などが極めて少ないことから清書本である。

題簽はなく、外題は表紙中央に「雄山記行」と記され、表紙の左下には「延興」と著者名がある。内題「八はたまうての記」「伊賀物語」「我伊勢物語」。料紙は楮紙。表紙にも同じ料紙を用いる。寸法二八・〇×二〇・五釐。丁数墨付三十二丁（「八はたまうての記」十二丁、「伊賀物語」十三丁、「我伊勢物語」七丁）。袋仮綴。右端が二箇所、紙縫で綴じてあるのだが、「伊賀物語」と「我伊勢物語」にはこれとは別に綴じ穴が二箇所残っており、現在のような形で綴じられる以前に、この二編は仮綴じされていたようである。「八は

たまうての記」だけに丁付があり、また外題の「雄山記行」が「八はたまうての記」をさすと考えられることから、やはり『雄山記行』は合冊であろう。「八はたまうての記」には、挿絵が二箇所あり、七丁表に「せいなう」の絵が、八丁表に「妙喜庵茶室図」が描かれている。「八はたまうての記」の末尾の十一丁裏と十二丁表には、「延興君の雄山の記行を見て／ことしの良夜ともに月見んといたしは／空ことにならし恨もとはたはるゝ斗の／言の葉にすかりて」として、「勸宣」「憲盛」「延報」の和歌が別筆にて記されている。「伊賀物語」の冒頭の十五丁表から十六丁表に書かれた漢文による跋文には「享和三癸亥初冬上院 鶴鳴山人書」と署名があり、他見に供したことが窺い知られるが、この漢文による跋文は本文と同筆である。

全体に、発句には朱にて見出し点が付けられ、漢文には同じく朱にて訓点が施されている。その他、地名などには振り仮名や傍線が

朱書きで記されている。

二

著者の「延興」について、『公卿人名大事典』（平成6年7月25日、日外アソシエーツ）では、次のように説明されている。

紀延興 きの・のおおき

江戸時代の人、非参議・南都八幡宮神主。宝曆6（1756）年生、文政11（1828）年7月没。73才。

南都八幡宮神主に任ぜられ、文政3（1820）年従三位に叙せれる。同11年没す。

延興が神主に任ぜられた「南都八幡宮」とは、手向山八幡宮のことである。手向山八幡宮は、天平勝宝元（749）年十二月、東大寺大仏殿建立にあたり、豊前国の宇佐八幡宮より東大寺の守護神として迎えられ、梨原宮の南に鎮座した。のちに大仏殿の近くの八幡池（鏡池）の東方に遷座され、建長二（1250）年に北条時頼が東大寺千手院跡と言われる現在地に遷座した。明治維新まで「東大寺八幡宮」と称していたが、神仏分離令により、地名を取り「手向山八幡宮」と称するようになった。

東大寺八幡宮で、代々神主をつとめてきたのが、紀氏である。延興は第二十四代目にあたる。紀氏は維新前後から上司姓を用いるよ

うになった。上司家に伝わる系譜を見ると、紀延興について、次のように記されている。

従三位安藝守

宝曆六年四月二日誕生 童名五男丸 後武丸

延興

前神主 従三位出羽守 延夏卿五男 母家女久子

妻和州狭川城主遺跡 狭川平次兵衛藤原助演女 親子

安永四年三月十五日 元服神役初参廿歳

称権神主延興

同 五年十二月十九日 叙従五位下廿一歳

同日 任安藝守

同 十年正月廿六日 叙従五位上廿六歳

天明六年二月三日 叙正五位下三十一歳

寛政三年正月廿五日 叙従四位下三十六歳

同 九年二月七日 叙従四位上四十二歳

享和三年三月七日 叙正四位下四十八歳

文政三年九月十三日 叙従三位 六十五歳

文政十一年七月八日薨 七十三歳

系譜の記述は先の『公卿人名大事典』の内容を補足するところが多い。紀延興の名は『公卿補任』（国史大系第57巻）昭和41年1月

31日、吉川弘文館)にも見られ、文政三年の項に「從三位」紀延興六十五 南都八幡宮神主。九月十三日叙」とある。また、文政十一年の項にも「從三位 紀延興 七十三 南都八幡宮神主。七月薨」とあり、これらの記述は上司家の系譜と一致している。

紀延興は、大正期に「鰻の皮」(「ホトトギス」大正3年1月)や「東光院」(「文章世界」大正3年1月)などの作品を書き活躍した上司小剣の父方の曾祖父にあたる人物でもある。上司小剣は手向山八幡宮との関係について、エッセイ「三十幾代の文学の家」(「文章倶楽部」大正7年3月)の中で、「私の家は作物の中に出るやうに代々から神主であつた。三十幾代といふもの同じ仕事をやつて来た。したがって、国学に志して、『古事記』とか、『旧事記』とか、『日本紀』とか、『源氏物語』とか、降つては『平家物語』とか、さういふものを必ず読まなければならぬ家風になつて」いた。自分が文学を志したのは、「さういふ遺伝的な力」だと書いている。また、エッセイ「南山踏雲録を薦む」(「新潮」昭和17年3月)では、小説『伴林光平』(昭和17年10月15日、厚生閣)の題材となつた「南山踏雲録」との出会いを、「私をはじめ『南山踏雲録』に接したのは、小学校の三年か四年かのときで、子供にむずかしい本を読ませることの好きであつた父」によつて「科外読本の格で、光平の『南山踏雲録』が取り上げられた」と語っている。上司小剣の父

は、伴林光平に就いて、国学と和歌を学んだので、「家には光平の短冊や、また父の詠草数百首に光平が丹念な朱を入れた薄葉の綴ち本が一冊あつた」という。そして、「奈良の本家には、伯父がやはり光平に師示したので、光平が奈良の獄中で十数日間に筆を走らして、同じもの三部を作つた『南山踏雲録』が一冊あつた。三部のうち二部は所蔵家がわかつてゐるが、一部は行方不明だと言はれてゐるその一部が、私の本家にあつたのを、私は少年のころ見たことがある」と述べている。つまり、当時ではなかなか目にするこゝろ出来なかつた「南山踏雲録」に、子供の頃から慣れ親しんだことが、後に小説『伴林光平』の執筆につながつたのであろう。上司小剣の文学的素養を考える上で、手向山八幡宮との関係は看過出来ない。

その上司小剣が自筆年譜の中で紀延興にも触れて、「父の家は、世々手向山八幡宮の神主たり。從三位紀延興の孫。延興、国学に深く、才藻に富み、和歌をよくす」と書いている。ただし、年譜の記述に「從三位紀延興の孫」とあるが、延興の孫にあたるのは上司小剣の父・延美で、上司小剣は延興にとつて曾孫になる。延興は文政十一年七月八日、すなわち上司小剣が生まれる以前に亡くなつてゐる。つまり、上司小剣とは面識がなかつたわけで、上司小剣は父親か誰かに曾祖父の話が聞かされていたのであろう。「和歌をよくす」とあるように、延興は多くの和歌や句を詠んでおり、詠草や歌合せ、

千句集なども残している。中には、『一條関白忠良公御点 從三位紀延興卿詠草』や『芝山殿御点 延興詠草』などもあり、和歌の添削などを通じて、延興と公卿たちとの交流やその文学的活動が知られる。自筆年譜において、上司小剣は、自分が文学を志した理由として、代々神官として国学に志してきた「さういふ遺傳的な力」を意識した時、祖先からの血のつながりの中で、身近な文学者として紀延興に言及したのではなかったか。延興は、和歌はもちろん絵や書を好み、南都の文化人として活躍しただけでなく、社史や神事の研究などによって八幡宮の復興に力を尽したという。そのようなこともあって、延興は、上司小剣はもちろん、上司家にとって、八幡宮にとって重要な人物だったといえよう。

その紀延興が、旅の道行きを綴ったのが、今回紹介する『雄山記行』なのである。『雄山記行』は、旅行の日程を簡条書きにしたようなものではなく、和歌や俳諧を好んだ延興らしく、行く先々での感興を詠んだ歌や句が多く記された紀行文であり、岩清水八幡宮への参拝の道中を記した「八はたまうての記」、伊賀の大福寺に住む法師を訪ねる「伊賀物語」、奈良から伊勢への旅立ち、伊勢の宮巡り、奈良への帰郷までを書いた「我伊勢物語」の三編からなっている。

「八はたまうての記」については執筆年代が明記されている箇所

がない。したがって、「八はたまうての記」の本文の最後の一文に「葉つき末の三日になりぬ」とあるが、何年の「葉つき末の三日」なのかは断定出来ない。しかし、紀延興が「八はたまうて」をしたのが「葉つき」であることから、「雄と古山の祭」とは、岩清水八幡宮で毎年八月十五日に行われる放生会であることがわかる。また、「八はたまうての記」には、旅先で見つけた「せいなう」の絵や「妙喜庵茶室図」が描かれている。妙喜庵は京都府乙訓郡大山崎町にある庵で、「八はたまうての記」にも「みやこのとう福寺のすへの寺」と記されているように臨済宗東福寺派である。明智光秀を追う秀吉が休憩所としたことから、秀吉や千利休の訪れる所となった。境内の茶室「待庵」は利休の創案により建てられたもので、現在国宝に指定されている。書院の縁から延段で前面の深い土間庇へ、さらに飛石を伝って開口へ導かれる。茶室内部は二畳で隅炬。次の間一畳と勝手一畳が付属している。大きさの違った下地窓と連子窓を開き、竹骨の障子が入れている。これらの待庵の構造と一致していることや茶室の側に秀吉の袖摺の松が描かれていることから、「八はたまうての記」に描かれた「妙喜庵茶室図」はこの待庵を写したものであろう。

「伊賀物語」の奥書には、「きよう和みつのとし／なか月すゑのむゐかに／ふてをやすめぬ」と記されている。更に「伊賀物語」の

跋文にも「享和三癸亥初冬上院 鶴鳴山人書」とあり、「伊賀物語」が享和三年、延興が四十八歳の頃書かれたものであることを裏付けている。また、書き出しが「なか月十九日」で始まっていることから、「伊賀物語」は享和三（1803）年九月十九日に起草され、「なか月すゑのむるか」、すなわち九月二十六日に脱稿されたようである。「伊賀物語」には、延興の古典文学への関心が窺える。「かさき山さし籠にしいにしへをあはれちしほに染るもみち葉」の歌とともに記される「かさきのたゝかひ」は、『太平記』の巻第三の内容を踏まえているのであろうし、また「あかりての代は伊勢の国なりしをわけられて、『風土記』を見れば」の記述は、『風土記』逸文の伊賀国の項に「伊賀の国は、往昔、伊勢の国に属きき」とあるのを引いている。また、「行平」という歌の部分を引用している。この歌は「立ちわかれないなほの山の峯におふる松ときかば今かへりこむ」という在原行平の有名な歌で、『古今和歌集』巻第八「離別哥」に収められている。ただ、遍照院を訪れた際に、卜部兼好の和歌を思ひ出し延興自身も歌を詠んでいるのだが、兼好の詠んだと言われる「うき草も清きなかれをたとる身は都といへと塵の世のなか」の和歌については、実際に兼好の歌かどうか判明しなかった。大方のご教授をお願いする次第である。

「我伊勢物語」も奥書に「ふむくわはしめのとし／なか月よりかみな月の／むゆかまでしるす」とその脱稿日が明記されており、文化元（1804）年九月から十月にかけて執筆されたと断定してもよいであろう。「去年も伊賀へ行て、思い出る假の筆を染て、いか物語といひしは、山こえのか妻無業なるを、猶あかすして、今年もかゝる事しはへるは、又友かきのわらはれくさなる、我い勢物語ならむ」という一文から、やはり「我伊勢物語」に記された道行が「伊賀物語」の旅の翌年に行われ、「我伊勢物語」は前の「伊賀物語」を意識して執筆されたことが窺える。しかし、その内容は、「伊賀物語」に比べて、発句が主体となっており、散文の部分はその前書を綴り合わせたような形になっている。

これらの三編からなる『雄山記行』には、紀延興の名所や旧蹟、神社や仏閣、それらの行事への関心が記されている。また、古人への思慕や古典作品への志向が指摘出来る。『雄山記行』は上司小剣の曾祖父である紀延興の文学的素養を示す資料であると同時に、近世後期における手向山八幡宮と他の社寺との交流や当時の地理や交通事情なども知れる史料でもあると言えよう。

末尾ながら、『雄山記行』の翻刻及び紹介をこ快諾下さいました、手向山八幡宮宮司・上司延訓氏に心より御礼申し上げます。

〈凡例〉

一、翻刻にあたり、旧字体や異体字は全て新字体に統一した。

一、本文の全てにわたり、私に句読点を施した。

一、反復記号については原文のままとし、濁点も私には施さなかった。

一、改行は原文に従った。丁付は全体を通し行った。

一、誤字・脱字等については、一切の訂正や注記を加えることをしなかった。

一、朱書きで記された発句の見出点、地名に付された傍線や振仮名、

また、漢文の訓点は特に区別することなく、そのまま翻刻した。

一、判読不可能な文字については、□で表した。

『雄山記行』

「雄山記行」(二十二)

八はたまうての記

△なかつ秋のなかのよか、ひつしの貝を聞ころ、

より出て雄と古山の祭にまうてんと、

古津の川辺にゆきて、ふねをたつぬれば、此こ

ろは水調で、舟のゆきゝ早からずときゝて、

壇つたひにはせのむらや路をさしていそけ

は、空かきくもり神なりて夕たつ雨に風そひ

てかさもやふるゝほとなり。されとふた月斗も

日てりて、やう／＼雨ふりければ、

・世にまつを思へは涼し秋の雨

暮るれば雨やみてまつ宵の月も出ぬ。

・やとしけりわさ田晩田の露の月

はふその村を過るに、いにしへの神領にや、今も宮居

神／＼敷て、あたりの草むらはむしの音しけし。

・祝園やかすかのをうつす虫の声

ゆき／＼て川辺に出る。松のはやしむら立て、白

洲ひろく涼しさにしはし休らひて、

・月みよといはぬ斗の真砂哉

秋の千草むら／＼ある道のはとりに、ゆきゝの人の

あしを休らはせ茶を煮てすゝめんと、せたいの

かりやをまふけ、賤の男打集り居て、心のまゝに

横にふし、うちわにて蚊をやり、物語などしたるも、

よる行道のたよりにてなつかしくおほへければ、

・擲て待やとは小はきを枕かな

とかくして八わた山程ちかくなれば、月影を友として、
いそく道すから、虫の音も一きわに聞なされて、

・神の業むらやの鈴かむしの声

月影の露に袖をぬらすも、中／＼秋の情

あさからすおほへて、

・契る秋に咲や女郎花おとこ山

ひさこに酒をたゝへて携へしをとりいてゝ、

・夕顔やさらは美豆野の秋の月

八幡の山もしみつといへる町に、うのた氏の

家にいたりて足をやすめ、夜のいるなとたうへて、

・なかりし夜もはやふけぬ庭の月

暁ちかゝらむと、放生河のほとりにいてゝ、

・魚おとる浪にくまあり川の月

・反橋も影をうつすや水の月

神の御幸を拝まんと、やしらの努のさにしきに

いれとゆるされしも、いとかしこかりて、きぬやの

領といへるかたはらに居て、時のうつるをまつほとに、

夜もすからあゆみこし道のつかれてゝ、

かたねふりするもらうかはし。

・ふしてまちあふきて月を宮居かな

行教和尚の勧請のむかしを察れし行清法印の
和哥も思いてらて、

・けに月の袖にやとるや神こゝろ

や、明行比に、神の出御あらんと、ふえ竹の声

やま谷にひゝきて、大うち山の月のきみ、みこと

のりをうけたまはりて行ふ司人近き衛り

兵のつかさ御馬のれうの官人なとかす／＼ありて、

つらなる袖のいろ／＼に、やしらの人／＼数しらす

供奉しいつるをめてたう覚へて面立処、

・月に立羽のはやしや鳩のみね

寮の御馬をたてまつるゝを見て、

・是も今日神に駒ひくか男やま

下の御あらかに御輿を入奉りて、今日はこと更

かしはての数を尽しのみてくらをさゆふきに

ふりはへて、限なき君か代を祈奉り、御法の

わさもかす／＼に時をうつして神の御心を

なくさめ奉る祭のありとかや。

和歌五首

・いにしへを思いつれはいとゝ猶かしこき神の御幸也けり

・八はた山秋の木のまをさし出る月の光そ世々にくもらぬ
・石清水濁らぬ御代そしられける底迄すめる月をみるかも
・神祭る君か御代をは守るとはしらるゝ四方の國のしつげさ
・おとこ山かひ有神の御幸哉影明らかき月の最中に
辰の時と思ふ比、うのた氏の家に帰りて休らひ

ぬ。鳥けた物は常にいむなれと、祭には猶魚をも

四オ

たうへすとて、竹うな松たけなどの塩にひたし
たるを取いて、心ふかく饗せらるゝまゝに、寸過る迄
さけたうへて、前の夜起明したれば、月のふたかる
まゝに枕をとりにて、まへともうしろともしらす
ふしぬ。

・夢なれや日は中空に袖の月

高槻の翁、此家に有。あひてさかつき取かはし、
ほくたと口すさまれしも、酔のうちなれば覚へす。

おきなはいつかたへか出ゆかれしとかや。

やう／＼目も覚ぬれば、本の社へまうてんと、山みちを
よちのほる。

四ウ

・山たかし稲葉の浪を四方の海

御やしろの前にいたりて、宮造のたうとき
いはむかたなし。武内殿を拝みて、

・かしこしななかれを結ふ水の月
心静に見ゆれば、琴を釣たる堂あり。

・ことの音や松にしらふる秋のかせ

山路をくたりて、かりの御座の廊のうちに、

大神を拝したてまつり、

・仰来て更に涼しき宮居かな

五オ

放生川の橋をこえて、よしむら仲亮のもとへ

尋ゆきて、年ひさしく相見すなどいひて、数／＼の

物語りに時をうつしはへる。

・とひよれば尽ぬ千種の花野哉

名残尽せねは、遠からずもまた問こんとて、うのた

氏の家に帰りぬ。

△暮て燈をかゝくるころ、

大神の還り給ふを拝んと、また山へ昇り、

さの鳥居のもとにてまつ。今朝のいつくしき

そうそくは改て供奉の人／＼杖をひきて、白妙の

袖に望月の影しらみ合て、松の火かゝやきて

けむ、□栗の笛つゝみ秋の風にひゝきわたり、

いとかしこさなみたを落すはかりなり。

・明らけし朝日の光夕月夜

五ウ

・笛たけも松吹風も秋の声

心しつかに山をくたりて、今よひはふもとの

里に枕を結ふ。夜明ぬれば宇野田氏の家

を出て、なし本のわたし舟をよひて、

・落鮎や川瀬の水の秋の色

呉竹のふしみへ引登る舟もをしてるの難波津へ

さしわたす舟も水のちからをかりて、一夜のほとに

往来のあけなるそうらやましけれ。

△大山崎の御やしろにまうて、

・とはすしてたかやまさきの神やしろ

かゝる宮居のありけるものを

・いのる身のいつくはあれと我神と

同じ御影のことにかしこき

此宮もきのふは祭りとして、うつつの広前にて、

すまひのいくつかひもありとかや。やしろのわき、

さうしにかけたる木子のこときもの、みきひた

りにあり。うしろのかたのみ見ゆるかたの下のほとり、

たてさまにひらくよしして、ひちかねふた所にうてり。

手のあたりにか勢木あるをさうしに掛たり。

六オ



ある人のいへるは、其垣の透し所より手をいれてぬちる
木あり。かくしつればかしわ手をうたするよし。名は

はそ男といへるよし。後に聞はへる、わか社にも

せいなうといひて、磯良の御神の舞出たまひ

しをうつすよしにて、祭ことに立舞へる事あり。

細男とかきて、せいなうといひ伝へたり。

御前をひたりへいつれば、里のかたはらに妙喜庵

といへるあり。尋よれば、豊臣の大岡山さきの

たゝかひに旅屋なりしとて、名ある人の画をかき、

利休居士かこのめるよし。茶室あり。あるし

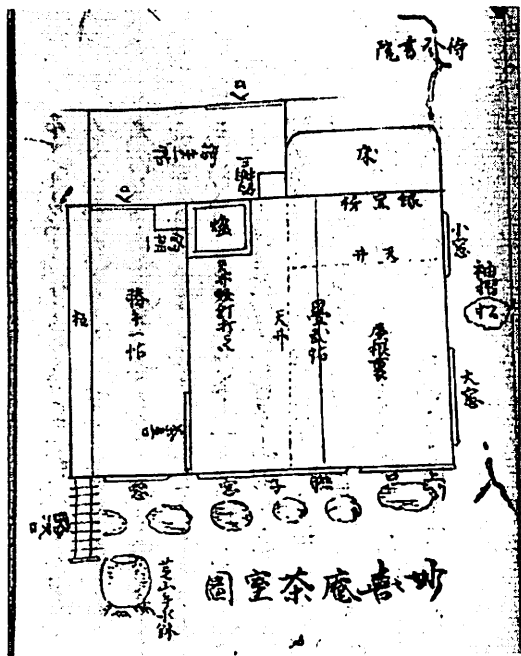
の僧の名をとへは、独園とて、みやこのとう福寺

のすへの寺にて、わか身は伏水のうまれのよし。年

いまた若けれと、物語いとこまやかなり。

六ウ

七ウ



八寸

そてすりの松は、はしめ利休のうゑしはかれぬ。うへ改しいまの松にも百とせに及へりとかや。大きな木也。いにしへの松は板につくりて、此寺の腰いたに造れり。幅三尺にあまれり。齋形のでう水はちは、芝山けん物のたてまつりしよし也。書院まち合の間、山水を系かきたり。さん楽の筆といへり。杉戸は松に鶴の画、かいほう

友松かきたり。茶室入口の画は、古法けん元のふかきしとかや。すへて屋造りさしたる良材にはあらねと、年ふりて物あはれにみゆるなり。

八ウ

宝寺とかや、名高きうちいての小槌とて、銭を送れはみするよしへと、奥へ入みちの遠ければ、つかれをいとひてゆかす。

・世にたくひあらぬたからも何ならずともしき事をしらぬ御代には久世村の橋をわたりて、桂の里の方をうちなかめて、

・暮ゆかはこよひも月の桂川さそしら波にいさよひの影長岡の天神、向日の明神、粟生のくはうみやう寺

などは、ちかき比とひしまゝに打過て、みやこのかたへゆく道を得て、鶴原とかやうかれ妻のすむ里も、

九寸

夜はさそといひて、余所にこえて東寺へいりぬ。門のわきに御社あり。いにしへわか御神の

御輿の入洛の時は、こゝに入給ふよし。ふるき文ともにあり。

・ねかふ事ゆるせと神も其むかし幾夜旅ねの枕かりけむ日もやう／＼傾くころ、宮占にいて、定栄宿禰のもとに宿をかりぬ。△御霊会を拝みて、

・今日祭る神のめくみに草も木もてる日にかれし陰そうるほふ

あるしの宿禰、としころにかはらすいやましの親しさに、
祭の事なとさわりもあらぬを共にことふきて、

一九ウ

日をへていとまをこひて帰る。△ふしみを過るころ、
雨いたう降ければ、

一十ウ

・ふし水野や呉竹けふる秋の雨

・朝霧にふか草分ん道もなし

小掠の壇を過るに、猶いたう雨降て、年／＼に

かよひ馴たる道なから、蓑はみやこにわすれ置、

かさは風そひてしのきかねたれば、長いけの駅に

一夜を明して、よすから鳴神をきゝ、雨も晝かけ

て頻りにふれり。

・鳴神に枕ひやせし夜の雨

あくれば辰巳のかた、少し雲はれて雨やみぬれ

は、道をいそきて狛の里にいたり、徳平氏の

家をとひてしはし休らふ。

・立ましりなてしこ残る花野かな

・瓜つるもうら枯になる狛野かな

さきの日、雄とこ山までは此家の母なる人

を伴ひし事なと語りあひて、はやわかふる郷の

ちかければ、古津の川舟をよひわたるとて、水の

一十オ

面をみれば、八わた山へ詣てし日は水かれて、

舟にのるへくもあらさりしか、夜もすからの雨

に濁れる水出きて、あわの流れたるに、里人

はこゝろ／＼に網を引、左手をさして落くる

魚をとらむと、こゝかしこにこそり居たり。

・秋の雨水上いかにいつみ川

申の時のかしらと思ふころ、奈良へかへりて、

・わか宿に立掃ても思やれば旅ねの月そ名残有ける

出たゝんとせしさきの日、にしむら氏よりもちの

夜は月を見むと消息ありけれど、日ころの

交りを等閑にして出ければ、

・もち月の影ふくる迄夜もすからふる郷人は嘸詠けむ

葉つき末の三日になりぬ。

一十オ

延興君の雄山の記行を見て

ことし良夜ともに月見んといたしは

空ことにならし恨もとはたはるゝ斗の

言の葉にすかりて

伴はぬ山路の月も言の葉の

つゆの光りに移してそ見る

勸宣

おなしく

月□会なへて發れと君のみや

秋の光をそへて見るらん

憲盛

岩清水すみぬる月やむしの音を

めてしこと葉は秋のにしきか

延報

「伊賀物語」(十三丁)

雅之為事也者雅実匪有体俗之為事也者

俗亦匪有体矣譬如籍紳文士之述市井商

旅之煩而載之諷詠則市井商旅之俗却為

雅俳優戲場之学月郷雲客之風扱之伎芸

則月郷雲客之雅正為俗矣始居先一也者

素以為神祇之職極國一学之繼奧且達歌道

之玄微也實有同胞一一法一師住于伊賀上野

而為大福精一舎之先生也遷一化既三一年今茲

十一ウ

暮一秋依其祥忌而頻發弔一古之懷已至其地

而乃宿大福精一舎矣當主頃日雖有翳一障之

惱然以先主同胞之由一縁而饜一庇殊以愍一勉

於是相留凡一一句其間所耳一聞目一擊之數一緒

悉興不入諷詠也婦家而纂一輯而以成冊自題

謂賀一話蓋比一勢一女之勢一語者乎余以同一志不

速來而令見之余見而歎日自詠一行一程山一野秋

色至千或一一宿遇雷一雨或弔往一古戰一場或夢一裏

逢故一人或慕一同胞之遺一蹤或拜一土神之祭一礼或

交一遊風一騷客或遊一教一個清一利之教一篇者皆

以雅之為雅而先一主之所不難遍以称一揚之者若

十三オ

十四ウ

謂尋一常乎至如彼曳筇干一險踏買銅一鍋以機一閃之頭

微一鏡而移近一世之變一態独一樂漢之感一辨一智是

諸一篇而乃吾所言之籍紳文士之詠市井商一旅之

俗却為雅之証於是乎存矣幸哉售鍋者且顯一微

独一樂之輩不值先一主之愛一玩者何得入文一雅之卿

乎実可一喜之酷也玩一味一一夜不設枕一席称一歎以有

余不顧鄙一陋速返一冊而題之云

享和三癸亥初冬上院

鶴鳴山人書

十五オ

いか物かたり

なかつ月十九日、いかの国に赴んとて出るに、いもり山の北を過て、ひら野の壇に昇る。

○あふきみる飯盛山いひの麓田のいな葉刈てや嘸怒らん今朝の雨に遅くやとを出ねれば、狭川い氏の許に枕をかりて、暫しまどろむほとに、雨ふり出て風吹、神いたう鳴りとゝろく。

○鳴神のひゝく枕にいな妻の添ふす床と明しかねぬるはつかやうく夜も明ぬれば出行に、笠置の禁川をわたりて、爰は古戦場にと、

○かさき山さし籠にしいにしへをあはれちしほに染るもみち葉峠をこゆれば、所くりに里ありて、川のむかひの竹むらのうちなる里はあすか路むらといひて、是なむかさきのたゝかひに、山のうしろよりあないまし者の住しゆかりとて、いまもかさきの人は腹あしく思ふとかや。

○興竹のうきふし有し里人の其名や世々に猶残るらむこそその秋はいにしへに稀なるほと水出て、おと歳かよひし道は崩れかはりて、はり道など処くりにあり。

○すきし秋もと来し道は川の辺の高き白洲や浪のよすらむ

十六オ

思よらぬ方迄、塵芥の打よせなかわるに、胸つふれぬ。

○心なき草木は物を思はずや折ふすはかり波はかけても○ふし沈む姿の仮に川竹の青葉はかれず秋風ぞ吹筈なる山をみれば、また空もはれず。

○崖にまの煙か降の時雨かとうき雲迷ふしからきの山百舌といへる鳥は、己かすむ梢を下て、問よる鳥をよせ、されは蹴をさるゝよし。啖あへるを見て、

○もみち葉と共に落きて鳴もすの梢あらそふ秋の山陰大川原の馬屋より左なるは、近江路の堺なる山にて、多羅尾といへる山里ありて、かよひくる賤の男は赤いろの布の衣をきたり。藤にて織たるよし。

十七オ

○絶すしも通ひきぬるかふち衣誰をゆかりのいろとしもなく此ほとりは、柳生家の領せる地にして、彼のいゑには世々つるきをとりてものゝふの道を守る名の高きなと思ひて、

○弓張の月にむかひてもみち葉のこたち奥ある秋の山さと嶋か原の渡し守をよへは、むかひの岸なる舟をさして来る。

○爰も又うき嶋か原吾妻路のふしの根うつる浪はたゝねと晩稲田のまたからねと、わさ田は刈あけてほすも有斗に、負はせて行もありて、たなつ物のまとしからぬ国のさまそみへける。ある賤か家によりて休らへは、商人いの休らへる有て、

あかゝねにて造れる物多くもてる中に、わか宿にあらま
はしき鍋なとみゆるは、是なむ名は何といふ物そと

尋はへれば、行平といへるよし。さらは因幡の山の峰に
生る松としきかはなと口すさむもおかしくて帰りこん。

家つとにせはやとかはりをとへは、都にてきゝしには似す、
いと安け也。

○おしますも我に還れよあき人の重荷くるしく山越んより
日のひかりさし水なともりやすらんといへは、なとさる事のある

へきといとあいきやうつきてあたへしに、旅のうさを慰め
行に、日はまた高く、道は程近くなるまゝに、長田川へは

ゆかす。西蓮寺の前を過て、木興川のいた橋を渡るとて、

○ありしにも替らさりけり此里を過る三年の前の棚橋

森のうちには高尾寺とて僧院あり。

○あひにあふ都床しき高尾てら愛宕の方もほとちかくして

左の方の山に寺ありて、遍照院とかや。昔下部兼好、

世をのかれて住る所なり。

○ちりの世とみやこを出て住にけむいつくも同じ塵の世に居て

彼ほうしの哥にうき草も清きなかれをたとる身は都と

いへと塵の世のなかとよめるを思出るまゝ也。あかりての

代は伊勢の国なりしをわけられて、風土記をみれば、
天の真名井なとも此国に有て、名所多し。あはれ
その森たれその杜なといへるもあり。

○問来ぬるむかしたれそのあはれその森の名朽す残し置けむ
梢にはなかねと申の時ばかりに、あたこの辺に大福

寺にいたりぬ。あるしの僧に此ほとおとつれのう
とかりしをわひて、せうとの法印の世をあかれし秋も、

はや三とせになれるをとふらひ来ぬとて、

○無跡の三とせの秋を問くれはうへの時雨で袖そかはかぬ

○おしめ共別れし鴈は又来ても忍ふ三とせの秋はかへらし

○別るゝも三とせ過るとしら露の置かふるまに秋を移れる

物そなへんと折櫃に花やらしなとたてゝ、無跡を追て

いたうしたへるこゝろをなしぬ。

廿一日、夜明れば、ゆかり有人く来りて、法の師のつとめ

ねもころ也。かれ飯に野山の珍しき物をそへ、追物なと

せしをたうへて、こし方をかたるもくり事ながら、世にある人の

常なり。盃の数にゑひしれて、日の暮ればふすかとせし、

枕上にあやし人の声あなるは、いかなるわさにやと問へは、三とせ

かほとにも人はなく成ぬと聞へ給ひし今日のことの葉

のなつかしくてなといへるを見れば、ものゝふなからいまは姿も

おとろへて、いかなる人そと思ふに、内保氏なり。
十九ウ

○世になしと思な捨そ桜花ちれば又咲春もこそあれ
かたはらなるは、吉蔵院の弟子すんりやう法師とかや。

○あとさきにかはりもそ行秋風の月をうこかす空の浮雲
誠や師の御房の歎限なからん。うしろなるはたそと
思へは瀧瀬氏にて、

○峰積る雪の光の白妙はいろにもそます香にも匂はず
かれを思ひ是を聞にも、雪月華の時／＼移りかはる事
と／＼めかたきに、暁の風さとふきて有つる夢は覚ぬ。けに
／＼つかれしまゝのわさならんかし。

廿二日の夕暮より衛藤氏のかたへ行て、慈仙など
豆麩
やきて酒をくむ。
二十オ

○なかき夜も語り尽さて鶏か音に名残そ残る灯の本
かへりてふすかとすれば、朝日さし昇るに鶴飼して目を
さましぬ。

廿三日、こよひは寺にありて語る。多喜衛藤の二士
来れり。岩高く苦なめらかに水流れ、月清く

雲取りて風涼しく、竹の下陰道細くして窓の灯かす
かに、海広く山遠くして浪空をひたし、けたも
のゝ声怖しうして夜山をこえ、鳥の音おもしろう

してひる野をわけ、四方の国ふり日の本もろこし
月の氏なる国の事まで、すみの四しうもよたりし
て語り尽すはかりにて、二人は帰りぬ。夜更で慳の
実たら／＼と落る音のみなり。

○小夜ふけて木の実の落る陰とへは月よりふれる雪のしらかし
此寺に伝へたる、もろこしの懷素といへる僧の筆跡あ
りて、くろきを白きにはいかゝながら、紙にうつしてみるも
めつらし。冠一疊通南極文一章落上上台

詔、從三殿去碑、到百蛮開野一館渡一花苑
春一帆細一雨来、不知滄一海上、天遣一幾時、廻

書一更会一要云、積一懷一素字、蔵一真俗一姓錢長一洲、人
徒一冢一粟一非一玄一畔一三一蔵之門人也一一夕觀夏一雲、
二十オ

隨一風一頓一悟一筆意、自謂得一草一書三一昧、

○逢かたき昔をさへにから人の心深さをみつ茎の跡
廿四日、日たけぬれば、雨降いて、屋守す。つれ／＼なる

まゝに、あたりちかき幸福寺へ至りぬ。西の山際まで
詠られて、雨の中もいとよし。寺のぬしは爰に居すして、
肥前の国より来れる若翁といへる桑門、しはしの

やとりをかれり。詩を作り、花を瓶にさし、はいかい
のれん哥などこのめるよし也。乞はへるまゝにたんざくに

書つけてくるゝをみれば、

二十二ウ

菊の花おの白きに世や耻んなど有又秋の雨

竹よりも其雫かなやつかれにもと乞へる

まゝにいなみかたくて、

○晩稲田や残るいろそふ秋の雨

これはけふの詠をつねの連歌につらねしほく也。

猶たむさくにかいつけよと出せしかは、

○浪白しうつは苦屋のあま衣

さきに揃衣のほく五十はかりせしかうちを思ひ出て

かいつけし也。今日の雨のけしきはなか／＼に珍しくて、

屈庵といへる隠士など来り。共にかたりて、入相のかね

の声を聞捨てかへりぬ。屈庵かはいかいの句にも、

なかき夜やみとりの髪の枕すれなといへり。

廿五日は此町の神祭なれば、やしろに詣てあたりを

見れば、かこめる中に絵をかきて玉の鏡をかけてのそ

めは、海もやまも其遙なる事かきりしられず。

灯の影数しらすありて、星かとそあやまたれ。鳥

羽玉のよるのけしきをまのあたりにみする事あやし

といはむもさらなり。なからん後の鬼をせむるも

楽みを極るもみへ、去歳の水漲りて、多く民草

二十二ウ

のみたれ流しもあり。難波の大寺に鳴神落かゝり

火つきて燃るも有。住の江の塩風あらく吹て、神の

みあらかの炎と消行も見へ、親鸞上人の教へ置

れし安心の道を分迷ひ争ひて、いと狼かはしき

様まで、此かこめるか中にこめたり。

○この玉のあらむかきりは世中にてらさぬ方はあらしと思ふ

独楽といふ物を手すさみに茶を売ものゝいへる、こ

まはいにしへ菅公の宰府にうつされ給ひし時

造り給ひ、かふりの緒をまとひて抛け笏にすへ給ひ

しより初れりと。かゝるしるしなき事をいひても、人に

ゑみをふくませおとかひをとくこそ、世を渡る

道は一すちならず覚ゆれ。

○こま／＼とみまくほしさに諸人の立ならふ袖を分つゝそ入る

市人の物うる声かしかましくてめてまとふうちに、

御神の出ますとて郷々の舞きたるは、いにしへ行幸の

蘇芳ソウホウ非ヒに高麗龍コウレイリウなど番バンひて御前にたちて

まつるをうつせし名残なるへく覚ゆ。いろ／＼のふりう

ともありて、けいにいにしへよりほうへんのつけ物ひとつ

物など、今に絶ぬ神の祭こそいとめてたくおほ

二十二ウ

○いまも猶神の御国の末絶す栄へを世々にみするかしこさ 二十三ウ

神かせやいせの浜おき打なひき今もゆたけき浦安の国
きのふの雨暗て、朝日さし人の心も雲を払ふとみへしも、

神無月ちかくて定なき時雨のふり出て、あふさきるさ

にけ行人のさはかしくなるに、やつかれも袖をかさして

ある寺に立よりてやすらふほとに、笠なととへのへて

しれる人の家にいたりぬ。是なんさきの夜夢にみへし

滝瀬氏の家なり。爰にて酒なとたうへてまでと、雨

やまず。日の暮るに、見るへき物の来へきはともしらすして、

いさや帰らんと出て、甥の小房をいさなひて、つまつくな

こゝろせよなといひて、からうしてわか帰る寺の近 二十四オ

つくまゝに、心をゆるして多喜氏の家に入れば、あるしの

碁を囲むを見るに、酔出て眠居るほとに時移りぬ。

○斧の柄の朽るもしらし乱れ碁をうちねふるまの夢かとそ見て

やゝさめぬれば、あるし盃とり出て勧るも、少しいなむ

こゝろなりしか、あるしの妻なるか物の声なとしらふるに、

ねふりこゝろもさたかにさめて、又さかつきをとりかはして、

○いく度も汲こそあかね諸共に老を養ふ瀧の流は

すん過る迄になれば、いとまをこひて寺に帰りぬ。

廿六日、空こゝろよく暗ぬれば、古郷に帰らんと迅出て、

行／＼道のほとりの黄なる葎なととりて行ちかふ。 二十四ウ

午の時はかりに、笠置の替にいたりぬ。

○定なき時雨も暗て今日は只笠置の山も名のみ也けり

こゝより人のすゝむるまゝに舟に乗て、泉川のなかれを

くたる。和東賤司瓶原加茂などを過て、木津川の

渡りに舟をよせて、夕暮少し過る比、奈良に帰りぬ。

おもひ出るまゝにかいつけしも、彼いせ物語には似るへ

くもあらねと、国の名なれば猶其仮に伊賀

物語といはむこそ、うとましくきこゆれ。 二十五オ

きよう和三つのとし

なか月すゑのむゆかに

ふてをやすめぬ

岸松亭

蛤居

二十五ウ

「我伊勢物語」(七丁)

二十六オ

我伊勢物語

なか月の末つかた、伊賀の国にゆきて、

ある人の家にて紅葉深といへる題を

とりて、

○千世をへん松も緑の陰浅み高峰のもみち染尽しては

いせへまうてんと常に思へと、ひとりはいかゝとおもひ

わつらひけるを、あるしの僧のいさ出たち給へ、わか

寺の従者をなといと浅からぬこゝろさしをたよ

りに出るとて、あら木むらをすくる比、空も

いとよくはれて、川そひの道あゆみよし。

・川音は空すむ秋のしくれかな

あわむらの大佛をたつねて、

・花咲し面かけうつす紅葉かな

長野峠をこゆるに、はしめていせの海をみて、

・山はとめ望む浪すむらみ道哉

・いせ宮や行秋残るむらもみち

明星といへる里にやとりし時、夜の鶴を

きゝて、

二七七ウ

・鳴鶴に故郷の子を思ふ夜寒哉

櫛田川にて網を引を見て、

・さひあゆや浪に暮行秋の色

朝熊山を見て、

・出る日の朝くま山や霧の中

二見の浦に出んと馬に乗て行に、故郷の

翁に逢ひて、いつちへとへは、鳥羽の浦に

行てあすは帰こむ、山田にて逢んなどいふも

つこもりなれば、

・今日別れあすは逢みん冬と秋

わたし舟にのりて、

・冬をむかへ秋を送るか渡し舟

神領の人／＼二見に詣て帰るをみれば、青

き草をもてり。みそきのはらへ草ときゝて、

・秋と共になかつ水草の御被かな

浦に出て、

・追風は秋のいぬ方か沖津ふね

磯辺伝ひにひろへとわれ貝のみなれば、

あまのうれるを求て名をきにくさ／＼有。

・桔梗と聞もかひあり秋のうみ

二七八ウ

折ふし干潟なれば、岩間の藻なとりて、

日の傾くまでありて、

・かれ今宵藻屑を秋の草枕

二七八オ

田面のかたは鶴のあまたをり居たり。

・うら馴ぬ田面の穂なみ鶴の声

興尽ぬれば内宮のかたへ至りて、川添に
すむ車館といへる御師のかたに枕を結ぶ。

・秋の夜の川音きよきまぐらかな

明れば神無月の朔日、朝日のいろわきて、

清らかにいさみつゝもたせ来たる衣を出し着て、

・旅にけさあふや袷の衣かへ

神に詣んと、なかるゝ水にて口すゝき、手をあ
らひて、

・神事は代々□らし五十鈴川

神無月といへる神の事にや其しるしをきかず

など、故宗定翁のいひしを思ひ出て、

・ありと来ていのらはなとか神無月

神前にて、

詣来ぬ秋の内外の神やしろ

・散まゝの木葉をぬさや神路山

五十年にちかき身の猶行末を祈りて、

・照日にやとけんかしらの今朝の霜

有し年詣てしも早程をへてなといひて、

三十九ウ

三

○仰来し三十三年のめくみ猶千とせの数にそへと折らん

やしろくをめぐりをかみて、又御師のいゝま

本もへ帰りて、山田へと出たつ。けくうの御師

楳本といへる方にやとりをさためて、道すから

思つゝけしことの葉をしるさんと筆を染るに、鳥羽へ

行し翁の出来たりてなつかしう物語し、子の比

帰りければふしぬ。あくればゆをあみて、外宮へ

参る。申すも恐あれと、

・神となりかれぬは声の一葉かな

神前にいてうの実多く落たるを拾ひて、わか

やしろの前にもありと思ひ出て、

・ふる郷に落しも同じこの実哉

天の岩戸に参る道にて、椎の実かしの実
なとひろひて、

・拾えしこのみも椎の木陰かな

・実をうへて生しくらへん櫛かしは

いわ戸に参りて出れば、神楽所の前に茶を

飲む所ありて、爰よりのそめは宮川より宇治

山田を見めくらし、伊勢の入海はるかに志摩

尾張の国まで眼の前にあり、不二の峰もみゆる

三十九ウ

三十九ウ

よしいへと、今朝は雲ふかし。

・雲の中とかたるも寒し不二の雪

心静に宮めぐりして、さらに旅ころもを

打ちつゝ、むまや／＼に酒をくみながら、

・はま萩の浪風ぬるむ小春かな

いかの国しるへの寺につきしかは、あるしの僧の

歌をよみしとて送らるゝ。

榮言上

△なか月の末つかたいせへ参り給ふ

人に送る

千はや振神代の跡をとふ人の袖になひかんいせの浜萩

掃り給ふをまちはへりて

伊勢の海あまの小舟のよる浪の浦のけしきや写絵とみむ

などよめり。かく志の浅からずして、先師にもをさ／＼

をとらさりけりと涙を落しはへる。一日は足を

休めて、前の日あるしの僧のかたりしをまよと

いふもの、今は世にしる人の稀なるにや求えしと

いひて、ちいさき書ひとつ取出たり。けに／＼金とも

國ともいひつへし。

みればけにかれ野に残る鳥の蹟

其夜は衛藤氏のかたへゆきて、よすから

物語して、あくれば神無月のむゆかに、
わか家へかへりぬ。

伊賀の僧に返すすとて、

○かゝる人あらすはいかて千早振神代の跡を問道もいさ

○かたるにも尽せしいせのあま小舟さしよる浦に鶴の鳴音は

去年も伊賀へ行て、思ひ出る俣の筆を染て、

いか物語といひしは、山こえのか斐無業なるを猶

あかすして、今年もかゝる事しはへるは、又友かきの

わらはれくさなる、わかい勢物語ならむ。

ふむくわはしめのとし

なか月よりかみな月の

むゆかまでしるす

岸松亭蛤居

(あらい まりあ／本学大学院生)

三十一

三十一

三十二

三十二